

「キリストを目指して」

マルコによる福音書 8 章 22 - 26 節

森島 牧人 牧師

メシアとしてのしるしを求めるファリサイ派の人々を残して、舟に乗られた主イエスとその一行がベトサイダへ着いたところから今日の御言葉は始まります。聖書は「人々が一人の盲人をイエスのところに連れて来て、触れていただきたいと願った。」(マルコ 8 : 22) と続きます。人々の願いは、主イエスの奇跡の御業でした。

かつて水曜集会で読んだ遠藤周作氏はその著作を通して、「奇跡を起こすことの出来ない無力な、しかし求める人々の身近にいて苦しみを共になさる」という在り方の中に、救世主イエスの真の姿を求めようとして物語を展開しています。読む者は氏の描くイエスの姿に触れながら、無力ということへの氏のこだわりをふと訝しく思ったりするのですが、神からの啓示・言葉として私たちに聞くことを求めている聖書は、主イエスの奇跡をどのように伝えているのでしょうか。

聖書には主イエスのいくつもの奇跡の場面が出て来ますが、その場面で主イエスが「私は神だ」と言われたことは一度もありません。また、マルコ 8 : 12 にはしるしを求めるファリサイ派の人々のことを深く嘆かれて主イエスが言われた「・・・今の時代の者たちには、決してしるしは与えられない。」との言葉もあります。それでは、主イエスの行われた奇跡の場面を通して私たちに示されるものとは何か。ここで私たちは主イエスの奇跡物語の向こうに十字架が見えるということに気がつきます。そして、それに続いて私たちが見るのは、行われたいくつもの奇跡さえも無力なものとして一筋の道を歩んで行かれる主イエスの姿です。奇跡の一切を封じ、父なる神にのみ頼り行くとの決断・・・この中で奇跡さえも無力なものとする主イエスの「キリスト・メシアを目指す十字架への道」はスタートしたのでした。

さて、人々に連れて来られた盲人ですが、同じマルコの 7 章にも耳が聞こえず、舌の回らない人のことが出て来ます。福音書のあちこちにそのような人々は登場し、みんな主イエスによって癒されるのですが、それは単に肉体の病が癒されたということではなく、もっと別のもの、すなわち主イエスが地上に来られた意味を知らされたということであるに違いありません。聖書には「イエスは盲人の手を取って、村の外に連れ出し・・・その目に唾をつけ、両手をその人の上に於いて、『何か見えるか』とお尋ねになった。すると、盲人は見えるようになって、言った、『人がみえます。木のようですが歩いているのが分かります。』・・・」(同 8 : 23 - 24) とあります。目が開かれたその人が最初に見たのは、自分と主イエスを見ている主イエスの弟子たち、つまり主を求め救世主として受け入れた人々でした。主イエスに従う者たちの集まりでした。彼が見たこの集まりこそ教会というものでした。そして、信仰の目を開かれた彼もまたそこに加えられたのです。キリストによる開眼とは、それは主に従う者の中に加えられて行くということ以外の何ものでもないのです。

主イエスは、2 千年後の今も、私たちの目を開き、「何か見えるか」と尋ねておられるのです。開かれた私たちの視野の中に、主イエスが盲人に最初に見た<主に従う者たちの集まりである教会>を求めておられるからです。

(要約奉仕 羽入田悦子)